

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 完了報告書

提出日：2009年5月11日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	財団法人 水俣病センター相思社
連絡先・所属など	〒867-0034 熊本県水俣市袋34 電話0966-63-5800 e-mail info@soshisha.org
調査研究・研修のテーマ	水俣市における廃棄物最終処分場建設計画の環境影響に関する調査研究

当初のテーマは、上記の通りとしていたが、2008年6月の産廃事業者の撤退に伴い、7月より、産廃阻止マニュアル作成に変更

2. 調査研究・研修結果の概要

2008年6月、産廃事業者IWD東亜熊本が撤退した。高木基金助成によって水質調査・地質調査・風力調査・交通調査を行い、その成果は反対運動に論理的基礎を与えた。また高木基金のネットワークによって、専門的知識を持つ人々の協力を得ることができた。高木基金に改めて感謝したい。

産廃反対運動の本当の困難は、対外的な事業者・行政・賛成派がもたらすモノは課題として対応しやすいが、内部的な結束のゆらぎや論理構築・行動方針の相違による対立の深刻化であろう。それ故運動を組織する人々は、表面的な動きにとらわれるのではなく、自分たちにできること・できていないことを把握することが重要である。

水俣はわずか5年間ではあるが、経験したことを文字化・資料化することによって、運動の現状や欠点把握に利用してもらいたいと考えた。水俣の個別的経験から普遍性を抽出して、産廃処分場反対運動に役立つマニュアル的資料を作成することにした。

マニュアルの基本構造は、

1. 産廃反対運動の組み立て方
2. 産廃反対の基本となる「安全性の考え方」の今日的水準を示す
3. 環境影響評価段階での反対の論理構築と実際例の提示
4. IWD東亜熊本の産廃処分場関連の資料

「水俣産廃阻止！市民会議」が作成した記録誌を表の経験とすれば、このマニュアルは運動の裏方の経験をまとめたモノである。

3. 調査研究・研修の経過

<スケジュール>

2008年

- 1月 処分場類似地形での焼却灰の飛散・接地逆転層の調査・撮影
水俣病事件研究会で発表、野鳥調査は毎月4地点にて行う
- 2月 搬入路の危険箇所聞き取り調査・マッピング
3地点に風向風速計設置、1年間の定点観測を開始
このころ熊本県がアセスメント準備書の公聴会開催予定
機関紙『ごんずい』で特集

- 3月 このころからサシバが飛来。大森地区に野鳥のビデオ観測装置実施。クマタカ営巣木確認作業(数回)、3月20日県知事意見提出日
- 4月 こいのぼりで陸海風の変化を観測
予定地周辺立体模型作成、山谷風のシミュレーション
- 5月 カジカガエルの調査、水生昆虫調査、『ごんずい』で経過報告

6月26日 IWD東亜熊本が熊本県に事業撤退を通知し、水俣に予定していた産業廃棄物最終処分場計画は白紙に戻った。

それにより計画していた調査を取りやめ、産廃処分場阻止マニュアルを作成することとなった。メンバーは福田一哉(元水俣市産廃対策室、現水俣クリーンセンター勤務)、藤本延啓(元熊本学園大学助手、現講師。産廃処分について豊島や青森県不法投棄などの研究者)、高嶋由紀子・遠藤邦夫(水俣病センター相思社職員)の4名。水俣の個別的経験から普遍性を抽出して、産廃処分場反対運動に役立つマニュアル的資料を作成することにした。マニュアルの基本構造は、

- 5. 産廃反対運動の組み立て方
- 6. 産廃反対の基本となる「安全性の考え方」の今日的水準を示す
- 7. 環境影響評価段階での反対の論理構築と実際例の提示
- 8. IWD東亜熊本の産廃処分場関連の資料

4. 調査研究・研修の成果

調査のために購入した機材は結局使用しなかったが、高木基金の助成によって水俣の産廃反対運動の中に、市民科学として大事な「自分で調べる」ことが了解されたように思う。わずか5年間たらずで事業者が撤退することによって、水俣の産廃阻止運動はその成果を得た。水俣の経験はかなりまれなケースと思われるが、産廃反対運動の目的は確かに「当該処分場ができないこと」ばかりでなく、運動展開の中で地域コミュニティや地方公共団体の環境政策と市民の関わりなど多岐に渡る課題を発見することができる。それがまた反対運動の根拠となり住民の自信を育てていくように思う。

水俣の産廃反対運動を後から振り返ると、結果的に、住民を組織して熊本県に圧力をかけ、事業者の失敗を誘い、また、事業者にイニシアティブを与えなかったことで撤退に結びついた。しかし、それは反対派住民が成功したというよりは、事業者のIWD東亜熊本が失敗したと言える。IWDは地域の状況を把握せず、住民の力を軽んじ、アセスメントに対しては費用優先で手抜きをし、積極的な反対派でも賛成派でもない中間層を味方につけることができなかった。住民側が真っ向勝負で事業者に勝つことは極めて難しいが、相手の失敗を誘うことで勝機は見えてくる。

全国の産廃建設計画がアセス開始後に自主撤退した例はまだほとんどない。水俣の事例が今後の阻止運動の役に立つように、水俣の具体的な経験から、できるかぎり普遍的要素を拾い出し、水俣発の「産廃阻止マニュアル」としたい。これは多くの人の助力によって産廃阻止を勝ち得た水俣の義務と考えている。

5. 対外的な発表実績

6 . 今後の展望

産廃阻止マニュアルは資料が膨大なため、紙媒体ではなくCDとした。この資料の利用対象者は、産廃反対運動を組織する人を想定しているため、誰にでも良く分かることを目的としていない。しかし本当に産廃に取り組もうとする人ならば、事態の進行に合わせて利用価値が生まれてくると考えている。非正規の資料も含まれているので、配布は高木基金や産廃処分場ネットなどを通じて信用のできる人々に配布したい。

高木基金へのご意見

高木基金は私たちにとってとても使いやすい基金でした。官庁のように事務処理ばかりが正確でその目的はいつでもいいような扱いをされる助成とは違って、目的に従った調査ならばフレキシブルに変更することが許されました。この産廃反対運動を通じて、私たちが水俣病患者運動の中で犯した過ちの修正を実現できました。調査という一つのテーマの中に結果ばかりでなく協働・現地とのつながり・手法の発見等々を織り込むこと、誰の利益のために行動するのか、その論理はどういう基盤に立ったものなのか、宣伝・扇動的活動と現実的な状況分析の乖離を意識すること等々でした。これからもさまざまな困難を抱えた運動主体を、高木基金が長く支えていけることを願っています。

7. 完了報告 英文概要

Recipient Name	MINAMATA DISEASE CENTER SOSHISHA
Belonging / Contact Address < 公表可能な問い合わせ先・ メールアドレスなど >	〒867-0034 34fukuro Minamata-city kumamoto-pref. J A P A N e-mail info@soshisha.org URL http://www.soshisha.org
Theme of Research/Training	Of the industrial waste disposal ground planned Outskirts Traffic, the weather, creature investigation
Name of the Organization Providing Training < 研修の該当者のみ >	

< 以下の空欄に前記 2 . に対応する内容を英文で記載して下さい。 >

In June, 2008, industrial waste enterprise IWD T oa Kumamoto withdrew. I performed water investigation / a geological survey / velocity of the wind investigation / traffic investigation by the Takagi fund furtherance, and the result gave an opposition movement the logical basics. In addition, I was able to get the cooperation of the people who had expertise by the network of the Takagi fund. I want to thank for a Takagi fund some other time. The thing that external enterprise / administration / agreement group brings the true difficulty of the industrial waste opposition movement is easy to cope as a problem, but it will be intensification of a fluctuation of the internal unity and the opposition by the difference in logic construction / course of action. That is why the people organizing exercise are not seized with superficial movement, and it is important to grasp that oneself does not come.

Minamata was only five years, but thought that I wanted the present conditions and fault grasp of the exercise to use it because a letter made what I experienced a document. I extracted universality from individual experience of Minamata and decided to make the manual document which helped industrial waste disposal ground opposition movement.

The fabric of the manual,

1. How to build industrial waste opposition movements
2. I show the contemporary standard of "a way of thinking of the safety" becoming basic of the industrial waste objection
3. The opposite logic construction at the environmental assessment stage and the real presentation in question
4. An industrial waste disposal ground of IWD Eastern Asia Kumamoto-related document

"MINAMATA SANPAI STOP! civic meeting" assumes the record magazine that I made the experience of the top, this manual is the thing which gathered up the experience of the stagehand of the exercise.

8. 高木基金へのご意見 < 高木基金の助成についてのご要望・ご感想など、 忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。 >

高木基金は私たちにとってとても使いやすい基金でした。官庁のように事務処理ばかりが正確でその目的はどうでもいいような扱いをされる助成とは違って、目的に従った調査ならばフレキシブルに変更することが許されました。この産廃反対運動を通じて、私たちが水俣病患者運動の中で犯した過ちの修正を実現できました。調査という一つのテーマの中に結果ばかりでなく協働・現地との

つながり・手法の発見等々を織り込むこと、誰の利益のために行動するのか、その論理はどういう基盤に立ったものなのか、宣伝・扇動的活動と現実的な状況分析の乖離を意識すること等々でした。これからもさまざまな困難を抱えた運動主体を、高木基金が長く支えていけることを願っています。

<以上です。ご協力ありがとうございました。>